

石狩川が育んだ泥炭の湿原を守る ナショナル・トラスト運動！（篠路福移湿原の再生）

NPO法人 カラカネイトトンボを守る会

活動の概要

「篠路福移湿原」は、4,000年前に石狩川によって形成された石狩湿原の一部で札幌市内に残った唯一の湿原であり、北海道内においても、ミズゴケを基調とした大変貴重な湿原である。カラカネイトトンボ（準絶滅危惧）・ゴマシジミ（絶滅危惧Ⅱ類）・オオミズゴケ（絶滅危惧Ⅰ類）・タヌキモ（絶滅危惧Ⅱ類）・チュウヒ（絶滅危惧Ⅱ類）・オオジシギ（準絶滅危惧）・アカモズ（準絶滅危惧）・エゾトミヨ（準絶滅危惧）・ヤチウグイ（準絶滅危惧）・エゾホトケドジョウ（絶滅危惧Ⅱ類）など約400種の生物が生息している（トンボ類は18種生息）。



写真1 カラカネイトトンボ（青眼型♂）

この地域は、40年程前に原野商法で切り売りされ、登記簿上では800人以上の地権者がいる私有地で、2001年からは急激に埋立てが進み、20ヘクタールから5ヘクタール（約200人の地権者）に減少、乾燥化も進んでいる。当会は、2004年より法人化し、ナショナル・トラスト運動を展開し、2005・6年に6区画を賃貸借契約を結び、7区画の測量を行い管理を開始した。2006年12月（会設立10年目）に日本ナショナル・トラスト協会の助成（155.6万円）により4区画684平方メートル、2007年度は、同協会より421.6万円を助成して頂き、8区画



写真2 埋め立て現場

2,518平方メートルの土地を買い上げ、湿原に生息する動植物の保護活動を訴え、全国的に消失しつつある湿原、湿地の保全活動を推進している。

購入済	12区画	3,202m ²	(4,815,500円)
購入内諾	3区画	495m ²	
賃貸借契約	3区画	3,108m ²	
			(札幌市・市道 2,732m ² 含む)
測量済	8区画	1,124,000円	
一坪基金		370,000円	(74坪分)



写真3 第1号管理地

活動の目的

湿原そのものが日本中から減少している。北海道は湿原の王国のように言われてきたが、いたる所で消滅の危機に瀕している。特に石狩湿原はその

80%以上が失われ、田畑や住宅地、札幌市の中心的エリアとなってしまった。その一部である篠路福移湿原は、開拓当時、泥炭を採掘した場所であり、先祖である開拓使の命を冬の寒さから守ってくれたのである。さらに、その採掘した後が、池塘となり貴重な水生生物の生息場所となって多くの命を育てている。この湿原が原野商法で売買され、最近では不法にゴミの処分、残土の受け入れを行い埋め立て、湿原の様相は大きく変貌し、貴重な生き物たち（レッドデータのリスト）が全滅に瀕している。行政側にも湿原の重要性とその保全の意義を訴えてきたが、理解は示してくれるものの、保全や買い上げという方向へは進まない。



写真4 管理地（手前）と埋め立ての現状

この湿原やそこに生息する生き物たちが消滅してしまってからでは手遅れとなってしまふ。その前に私達は立ち上がった。このすばらしい湿原とその自然を子供たちに残すために。

1. 石狩湿原の一部であった篠路福移湿原とそこに生息する全ての生物を保全する。
2. 破壊された湿原の再生と未来に向けて新しい湿原を造っていく。
3. 地域住民、市民をはじめ、多くの方々に湿原の素晴らしさ、大切さを啓蒙する。

活動内容

篠路福移湿原が注目されたのは、1996年札幌拓北高校理科研究部によって、絶滅危惧種のカラカネイトンボの調査が開始された事による。1997年地域住民と札幌拓北高校理科研究部の顧問の先生によって「カラカネイトンボを守る会」が結成され、以後、住民と高校の協働で保護活動が続けられてきた。主な活動としては「篠路福移湿原」

の保全・保護、湿原のビオトープ「とんぼの学校」の作成、カワセミの人工営巣場所の設置及び観察調査、エゾアカガエル・ニホンアマガエルのビオトープ「かえるの学校」の作成及び観察調査、「トンネウス沼」（雨水調整池）の浚渫作業・清掃、あいの里公園内の「ホタル池」の整備（今後ホタル・ハウス設置の検討）等、多岐にわたっている。

現在は拓北高校・理科研究部以外にも旭丘高校・生物部、OB・OGの大学生、あいの里東小学校、あいの里東中学校など小中学生と地域住民（町内会）・諸団体が加わり、一体となって幅広い活動が続けられている。いわば、高校生を中心に小・



写真5 カワセミの人工営巣場所づくり



写真6 エゾアカガエルの観察会



写真7 オタマジャクシをとって遊ぶ子どもたち



写真8 トンネウス沼の清掃



写真10 タチギボウシ

中・大と地域住民が一体となり活動を広げている。

1. 過去11年間にわたり篠路福移湿原の無機的環境及び動植物の調査・研究を行い、保全・保護のための資料を集積してきた。(水質・水位調査、トンボの成虫、人工池塘の水生動物調査等)
2. 湿原の埋立てられている場所から水生昆虫や植物を採取し、湿原の希少生物の絶滅を防ぐため、茨戸川(旧石狩川)の河畔当別町美登江に湿原のビオトープを作り続けている。このビオトープは2001年7月、札幌河川事務所様の協力を得て10tトラック4台分の泥炭を運び約1ヘクタールの面積を造成し、「とんぼの学校」と名付けた。春と秋に草刈りなどの管理を行い、夏にはこの場所を使った観察会やレクレーション、植樹等も行っている。石狩湿原の再生と、人と人との交流「和」作りの場所となっている。

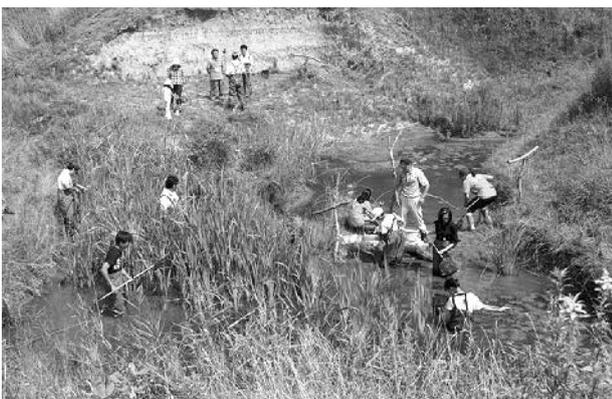


写真9 ビオトープ「とんぼの学校」の整備

3. 湿原の重要性を広く市民に訴えるための啓蒙活動にも力をいれており、パンフレットの更新、絵はがき(湿原のとんぼの写真)の作成、春(エゾアカガエル)・夏(カラカネイトトンボ・ノハナシヨウブ・タチギボウシ・モウセンゴケ等)の観察会、小学生によるホタルの放流会・光観察会とほ

たるコンサート(札幌拓北高校理科研究部が12年間、インドヒラ巻貝でホタルの幼虫を育て、コンサートにはあいの里東中合唱部・拓北高校吹奏楽局が演奏する。)、JR札幌駅でのパネル・写真展(会員の募集・募金活動)、湿原の保全について話し合いや学習会を行う「カラカネイトトンボと〜きんぐ」などのイベントを実施している。2008年度は、湿原周辺の水環境をもっと詳しく理解するために「茨戸川・カヌー巡り」を企画している。

さらに、通信の発行(年4回)、ホームページの管理、他団体との連携[NPO法人真駒内回廊基金、茨戸川清流ルネッサンスII、みずウォー



写真11 篠路福多湿原の観察会



写真12 ホタル池の整備

ク（読売新聞社）、リバーマスタースクール（環を考へ実践する倶楽部と共同）、石狩川下流当別



写真13 ハイケホタルの幼虫の放流



写真14 ホタルの光観覧会での説明



写真15 東京大会表彰式



写真16 韓国での発表会



写真17 韓国大会に参加したみなさん

- 地区自然再生ワークショップ、あいの里東中出前講座（3年対象）、「川の日」ワークショップ北海道大会6回・東京大会3回（2007年度グランプリ）・韓国「川の日」大会1回参加している。
4. 湿原を保全するため土地の買収、ナショナル・トラスト運動を行っている。2002.7.20（署名1,958名）、2003.12.17（署名2,062名）と2年間にわたり札幌市長に篠路福移湿原の保全を陳情した。しかし、市としては理解はしたものの、土地の買い取りはできないとのことだった。2004年には組織をNPO法人化し、2005年には約200名の地権者に湿原の保全を郵送にて訴えたが、約半分は該当なしで戻ってきた。2006年には6区画の賃貸借契約を結び、測量も7区画を行い、湿原の一部4区画、684平方メートル、2007年度は、8区画2,518平方メートルを買取った。
 5. ナショナル・トラスト運動をさらに推進していくため、2007年度から「一坪基金（1坪5,000円）」を開始し、さらに、地権者へのおたより・交渉（買取り・賃貸借等）を継続的に行っている。2008年度は地権者18名、（27区画）と交渉中である。

活動の必要性・緊急性

最近、湿原は、その保水機能、浄化機能、野生生物の生息地である事などにより、その重要性が広く認識されてきた。この湿原には、カラカネイトトンボをはじめゴマシジミ、オオミズゴケ、タヌキモ、エゾトミヨ、ヤチウグイなど絶滅危惧種の貴重な動植物が生息している。しかしながら、湿原の周辺からの埋立てが進み20ヘクタールあった湿原が5ヘクタールまで、激減しており、また乾燥化も進んでいる。このままでは湿原は消滅し、希

少生物は絶滅するだろう。活動の必要性・緊急性は、「篠路福移湿原を保全しここに生息する貴重な生物を絶滅から救う」事である。地元で古くから住んでいる方曰く、「ここは花が一杯咲いてサロベツ湿原よりもきれいだった。」

篠路福移湿原は大変小規模ではあるが、これを保護・保全する事は、現在湿原・湿地の機能（・湿地を利用する生物の多様性・物理的には水の貯留・生物化学的には微量成分の供給など）が見直されており、その重要性が高く評価され社会的認識が変わってきていることから観て大きな社会的意義、効果はあると考えられる。当会での湿原の取得は、湿原保全のために研究調査をしている高校生たちをはじめ、地元住民のより一層「自分達の湿原」と云う意識が強くなり、「湿原の再生」に「力」が加わっている。

活動の今後の計画

1. ナショナル・トラスト運動（「一坪基金」運動）を推進し、湿原の買取りを一步一步進めて行く。



写真18 湿原の再生をめざした笹刈り



写真19 湿原の再生をめざした雪積み

- (今後の資金源、また企業とのタイアップも検討中)
2. 湿原の再生（乾燥化防止）に向けて、水質・水位調査（トレンチ使用により水位を上げる、水位計測器の設置）、笹刈り、雪積み（排雪場所としての検討）、人工池塘作り、表地剥ぎ（10cm・20cm・30cm）、板打ち、排水溝の埋立てなどを行う。
 3. 市環境局・建設局、顧問弁護士と連携し、湿原埋立て阻止、原状回復の活動を始めたい。
 4. NPO各団体、開発局・市環境局（環境緑地登録・風致地区の検討）などの行政との連携および関心のある企業との協働など幅広く情報交換し、会の「継続性」を維持したい。
 5. 私たちが活動しているエリアの、篠路福移湿原、とんぼの学校（ピオトープ）・かえるの学校、トンネウス沼・ホテル池、茨戸川、石狩川・当別川合流地域の自然を維持・保全し（環境再生や循環型社会の樹立）渡り鳥たちが、飛来して、休憩がとれる、そして「ラムサール条約」を結べるように、近い将来に 実現したいと考えている。

綿路昌史



写真20 トンネウス沼での昆虫採集